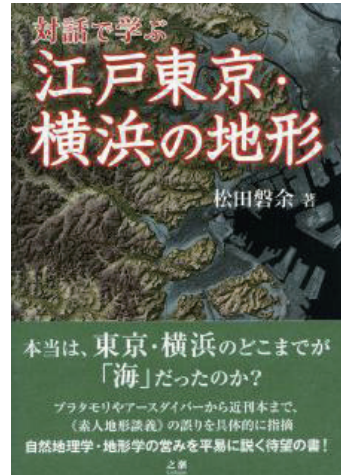


対話で学ぶ江戸東京・横浜の地形

松田磐余 著

株式会社 これしお 之潮
2013年12月出版
A5判 カラー口絵8頁
+本文256頁
ISBN: 978-4-902695-21-2
価格 1800円+税



人類学者である中沢新一氏の著した“アースダイバー”（講談社）やタモリが東京の各地をお散歩するNHKの“プラタモリ”の影響もあり、市民の間では東京地形散歩が密かなブームになっているらしい。このこと自体は、我々のような地形地質を生業とする研究者にとってはよい兆候と言える。例えば、今から約6000年前の縄文時代は、現在よりも海面が高く、東京の下町や都心の一部に海が入り込んでいた時期があったことは地学をきちんと学んだ人間ならば常識的に知っていることである。しかし、例え我々プロであっても、“神田や上野のどこまでが入り江だったか？”と問われた場合、即答できる人は、それ程は多くはないことであろう。中沢氏の著した“アースダイバー”は、東京の現在の地形に縄文遺跡の分布図を重ね合わせて、あちこちを探索した人類学もしくは文学的センスで書かれた地形ガイドブックである。この本の巻末に付録しているアースダイバーマップやこの本から派生した“アースダイバーマップbis” (<http://e.mapping.jp> 2014/01/31 確認)を見ると、当時の海岸線は北から王子～上野、お茶の水、皇居付近、芝公園、三田～品川の台地となっている。現在の神田川や善福寺川流域の低地には海が流れ込み、それに沿った大小無数の台地はフィヨルドのように複雑に入り組んで半島か岬のような海進地形をしていたことが、芸術的に描かれており、その点においては、我々からみても十分評価できる内容と言える。ちなみに“アースダイバーマップbis”は、多摩美術大学中沢新一ゼミ×首都大学東京大学院渡邊英徳研究室有志のコラボレーションによるプロジェクトであり、“縄文地図を片手に、東京の風景が一変する散歩の革命へ。見たこともない、野生の東京が立ち上がる。誰も書かなかった東京創世記。”というコンセプトで企画され、現在も進行している。

その一方で、昨今のこの種の地形普及書やテレビ番組には、必ずしも正しいとは言えない記述が見受けられることがある。そのことについて、出版社之潮の芳賀 啓氏が月刊地図中心476号誌上において指摘し、インターネット上でもたびたび話題にあがっている。残念ながら前述した中沢氏の著した“アースダイバー”も然りである。筆者らの知るところでは、“縄文海進によって今より数十メートルも海面が高くなり、関東平野一帯が海の底になっていた。”という観光パンフレットの文章を目にしたことがある。これは明らかに12～13万年前に起こった下末吉海進（古東京湾）と7000年前の縄文海進（奥東

京湾）を混同し、しかも海面変動と地殻変動を誤って理解している。一般市民の感覚として、数千年前も数万年前も同じ“現代人が生活する前の大昔”であって、実生活とは直接関係しない、その曖昧さが意識の根底にあるように思える。

“古い地形を想像する行為が一人歩きして、巷で誤った情報が流布されている！”という憂いを関東学院大学の松田磐余名誉教授がもたれたことが、季刊Collegioに連載する動機付けになり、その8回分の文章を対話形式としてわかりやすく手直しされて、2013年12月に、“対話で学ぶ 江戸東京・横浜の地形”というタイトルで、普及書として出版された。

本書は、それぞれ独立した内容の8章から構成されている。

- 第1章 都心部の地形—日本橋台地・江戸前島・日比谷入江
- 第2章 山の手台地を開析する谷の地形と地盤
- 第3章 横浜市中心部の地形
- 第4章 横浜市金沢低地の地形
- 第5章 山の手台地東北部（赤羽付近）の地形
- 第6章 多摩川低地の形成
- 第7章 東京23区と周辺の地形発達史
- 第8章 東京・横浜の地形を理解するための基礎

この中で特に第8章は、我々の居住するつくば市周辺を含めた関東平野の地形を理解するための基礎知識を、とてもわかりやすく記述している。さらに、巻頭の口絵カラー8ページには、「おもな駅名」を記載した東京・横浜デジタル地形彩陰影図が付いており、視覚的にも本書の内容を理解しやすくしている。また、本書は、“著者と読者の対話形式で、専門用語をできるだけ使わず、平易な文章で書き綴られている。東京や横浜でお散歩する際に携帯したい正確な解説のなされた地形ガイドブック”と言えよう。なお、松田先生のその他の名著に、“江戸・東京地形学散歩 増補改訂版”（フィールド・スタディ文庫 Collegio Field Studies 2；ISBN978-4-902695-09-0）があることも、文末に申し添えておきたい。

（産総研 地質情報研究部門 七山 太・大井信三）